
ソクラテスの背中

やしろ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソクラテスの背中

【Nコード】

N5809Y

【作者名】

やしろ

【あらすじ】

夏休みの暑いある日、何年も帰って来なかった姉ちゃんが突然帰って来た。受験生であるおれを尻目にのんきに遊んでなんかいるけど、いったいどうして帰って来たんだろう？モラトリアムのど真ん中で、二人の姉弟がちょっとだけ前向きになる、夏のお話。

教訓その一、年上のきょうだいは容赦がない

年上のきょうだいって、ちょっと先に生まれて来たっただけで、どうして弟に対して、「遠慮」という言葉がこの世にないもののように振舞うことが出来るんだろう。

というのも、真夏の昼下がり、太陽の光を直に浴びながら歩き、ふらふらになって家に帰って来たおれに姉ちゃんが突き付けたものは、足踏みポンプだったからだ。

「…何これ」何年も会っていないきょうだいの再会の一言目に使われるセリフじゃないとは思った。夏の日差しというのは、こことんまで人間の思考を鈍らせてしまうものらしい。

「何これ、はないでしょう、司。家に帰って来たんだから、まずはおかえりって言う。ね？」姉ちゃんの答えもことんずれているような気がしたけど、こっちは別に日差しの有無は関係ない。もとからずれているのだ。全然、変わってない。

ため息が出た。自分の子どもが迷子になって、さんざん心配してようやく探し出したというのに、「えーっ、まだ遊んでいたいんだけど」と言われた親の気持ちって、たぶんこんな感じなんだろうな。何年も帰って来ないから、それなりに心配していたというのに、のんきなもんだ。

素直に言われたことに従うのも癪な気がして、おれはわざと声をとがらせて言ってみる。

「今おれが帰って来たところなんだけど」

「何甘いこと言ってるのよ。社会人として家を出た姉が久しぶりに帰省してきたんだから、親の脛かじってる弟のあんたが私におかえりを言う。これが順序というものよ」

よくわからない理屈を平然と言ってるける姉ちゃんには、8月の太陽に負けなだけの力強さがあって、順序うんぬんというくだりにはまったく納得していなかったのに、おれの口からは自然に「お

かえり」という言葉が出た。

「ただいま、司」

姉ちゃんは嬉しそうに笑った。

その笑顔が昔と全然変わってなかったから、おれはちょっと顔をしかめて見せた。

元気そうで安心した、なんて思ったことを認めるのは、やっぱり癪だったから。

「ときに、司くん。今日は暑いと思わない？」

姉ちゃんは手に持った足踏みポンプをちらちら見ながら言う。

おれは自分の眉間にしわが寄っていくのを感じた。

姉ちゃんがくん付けしてくるときは、おれにやつかいなことを押しつけようとしてくるときだからだ。

「うん、すげー暑い。庭に長居するのはよくないよな、やっぱり。おれ、部屋行かなきゃ。勉強しないと」玄関のドアノブに手を伸ばすも、姉ちゃんは割り込む形でそれを遮った。

「そんな司くんに朗報です。これはね、踏むだけでこの殺人的な暑さから逃れられる魔法のポンプなの。そんなわけだから、踏んでみなさい」

姉ちゃんが、できの悪いキャッチコピーを並べ立てている間に、おれは色あせた黄色いポンプの先を目でたどった。チューブは、ポンプと同じく色あせ、くしゃくしゃになったビニールのかたまりにつながっていた。

「要するに、ビニールプールを膨らませろってことだろ」

「まあ、夢のない言い方をすれば、そういうことになるわね」

姉ちゃんのあっけからんとしたものの言いにおれはため息をつく。世の中の25歳って、みんなこうなんだろうか。

「踏むだけで涼しくなれるんなら、姉ちゃんが踏めばいいだろ。」

おれ、譲ってやるから」それだけ言って自分の部屋に逃げ出そうとするおれを、姉ちゃんは素晴らしい反射神経で捕える。

「何言ってんのよ。踏むだけで涼しくなれるわけないでしょう。」

あんだ高校生にもなつてそんな甘ったれたこと言ってる、すぐに社会に出てカモられちゃうわよ。ほら、そうならないためにも、これを踏んで世の中の厳しさを体に刻みなさい」

涼しくなるって言ったのはどのどいつだとか、ポンプ踏んで強い精神が身に付くなんてそれこそ甘い考えだ、とか言うべきことはたくさんあつたんだろうけど、おれは言わなかった。言えば10倍になって返ってくるのがわからないくらい付き合いが浅いわげじゃない。

「おれ、勉強したいんだよね。ほら、受験生だし、学校からの課題もあるし。それに、学生の本分って、勉強だろ」と、正論を盾にしおらしく言ってみた。泣き落としみたいでちよつと抵抗があつたけど、このままだと姉ちゃんのペースに巻き込まれてしまう。

おれだってもう高校生だ。しかも最高学年。ビニールプールを膨らませて喜んでいるような年ではないのだ。

姉ちゃんの中では、おれは何年も前の「小さな弟」のままなんだろうけど、そうそう振りまわされてばかりもいられない。自分の立場を確立するためにも、ここはなんとしても逃げ切らなきゃいけない。我ながらみみっちい戦いだと呆れてしまうけど、こういう些細なところから白星を拾っていかなくちゃ。

そんなおれの健気な試みを知ってか知らずか、姉ちゃんはすぐに「あら、足踏みポンプを踏むことだって、立派な勉強よ。物理の試験で関連問題が出るかもしれないじゃない。それに、大学だってビニールプールをふくらました経験のないような世間知らずな学生なんか、今どきほしがらないわよ」と、よくわからない屁理屈を返してくる。

姉ちゃんのすごいところは、どんなに根拠のないほら話であろうと、堂々と断言できてしまうことだ。

そしておれの情けないところは、その勢いに根負けして何も言えなくなってしまうところだろう。

おれは反論するのを諦めて、おとなしく足踏みポンプを踏む作業に入る。

何が嬉しくて、真夏の昼下がり、自宅の庭で、汗だくになりながら足踏みなんてしているんだろう。

ビニールプールはおれの気分とは反比例に、踏むたびに盛り上がっていく。

姉ちゃんとおれは7歳離れている。二人しかいないきょうだいにしては、けっこう年の差がある方なんじゃないだろうか。

小学生の頃は頻繁に友だちの家に遊びに行ったりもしたけど、ランドセルの隣に物理の教科書が転がってる家は、余所では見たことがなかったような気がする。

「ひゃー、なんだこれ、呪文？」遊びに来た友だちが姉ちゃんの教科書を勝手に拾い上げて驚くのを、「おいおい勝手に触るなよ。姉ちゃん、怒るとマジめんどくさいから」とたしなめながらも、内心まんざらでもなかったことは今でも覚えている。

その頃の7歳差というのは、「子ども」と「大人」くらいの開きがあったように思う。

アルファベットをようやく全部覚えたかどうかというおれは、姉ちゃんが使い込んでいる英語の教科書の密度を前にしてただ言葉を失くした。

この教科書と向き合える未来が本当にあるとしたら、未来って、なんて遠いところにあるんだろう。

月まで歩いて行くのと同じくらい、途方もないことのように思えた。

「宿題だから」

教科書と、それを使って勉強している姉ちゃんを見比べて神妙な

顔をしているおれに、姉ちゃんはそう言った。

「別に、全部をそっくり理解出来るわけじゃないよ」

その口調が、なぜか言い訳しているみたいに気まり悪そうだったことが、余計に姉ちゃんとおれの差を際立たせていた。

それが7年分の開きなのか、おれがもつと大きくなれば埋められる距離なのか、今でもわからない。

その後おれは中学生になり、姉ちゃんは働くために家を出た。

使う人間のいなくなった教科書を、おれはたまに開いてはそのたびにため息をついた。わからない単語だらけの現状に脱力したというのもあったけど、それだけじゃない。

いつかおれが姉ちゃんの年齢になれば、こんなわけのわからない文字の羅列も理解出来るようになるだろうかと、せっかちに膨らむ期待を押し出すためというのが大きかったような気がする。

そのくせ、ときどきマーカーで線が引かれていたり、単語の上にその意味がメモしてあるのを見つけるたび、姉ちゃんをすごく遠くに感じた。

おれが紙飛行機のように頼りなく、乗れる風をさがしているあいだに、姉ちゃんはジェット機のように、音速でおれを引き離していく。

飛行機雲をまっすぐ残して、見えない場所に行ってしまう。

おれにとって、姉ちゃんはそんな存在だった。

ようやくビニールプールを蘇らせ、姉ちゃんを呼びに家の中に入ると、話し声が聞こえて来た。

うちは一直線に伸びた廊下に面していくつかの部屋が並んでいる構成だから、姉ちゃんがどの部屋にいるのか、おれからは見えない。最初はテレビでも点けているのかと思ったけど、姉ちゃんの声がそれに混じっているのは変だ。家には今、おれと姉ちゃんしかいない。おれがこうして黙っていることを踏まえると、話し相手はいな

いはずだ。一人暮らしをするうちに、独り言やテレビに話しかける癖でもついてしまったんだろうか。

「すみません、ええ、はい」

姉ちゃんの話し声が急に大きくなり、おれは身を硬くする。

声の聞こえてきた部屋をそっと覗き込むと、こちらに背を向けた姉ちゃんが携帯を握って頭を下げていた。

姉ちゃんらしくない早い口調にたじろいで、そこを離れることも出来ずに、おれはただ立ち尽くした。

「はい、そうです。先生には伝えておきましたので、いつも通りにやっていたいてかまいません。はい、大丈夫です」

仕事の話、か。自分に言い聞かせるように、胸のなかで反芻した。そうだよな、姉ちゃん、働いてるもんな。電話くらい来るよな。

上司だっているだろうし、クレームが来れば謝るのは普通だよな。

頭ではわかつていのに、受けた衝撃はなかなか引いていかなかった。

すごく子供じみたことだとは思いつけど、姉ちゃんが誰かに頭を下げているという現実が信じられなかったのだ。

べつに、姉ちゃんが敬語も使えないような無礼な人間だと思っていたわけではない。記憶をちゃんと辿れば、怒られたり謝っている場面なんていくらでも出てくるはずだ。家庭訪問で担任の先生が家に来たときだって、ちゃんと礼儀正しく接していた覚えがある。

おれにするような振舞いを、全員にしているわけじゃないことも知っている。

でも、たぶんそういうことじゃない。

今、背中を丸めて、ここにいない誰かに頭を下げ続けている姉ちゃん、
「姉」でも「生徒」でも「子ども」でもない、知らない名前を生きている。

その片鱗を見てしまったことは、すごく悪いことのような気がた。それでも目を逸らすことが出来なかったのは、おれが姉ちゃんとは違う名前を生きているからだろうか。

「はい」の間隔が狭まり、最後に「失礼します」と言うと、相手が先に切るのを待つような間を空けて、姉ちゃんは携帯を耳から離した。

「わ、びっくりした。いつからいたのよ」

こっちに振り返った拍子に驚く姉ちゃんに何と言ったらいいのかわからず、目を合わせられないおれに、姉ちゃんはふっと笑って言う。

「仕事の電話。ちゃんと連絡伝わってなかったみたい」

休み中にまでかけてくるんだからびっくりしちゃうよね、とおどけて付け加えた言葉は、おれに言い訳していかのように、気まり悪さを少しだけ滲ませていた。

「帰って来ちゃって、大丈夫なわけ？」言ってから、これじゃまるで、家に帰ってくる暇があるんなら仕事してると言っているように取られかねないことに気付いて、「いや、仕事うまくいったんのか、ちよつと気になって」と慌てて付け加えた。

姉ちゃんはおれの言葉のニュアンスを取り違えなかったようで、とくに気を悪くした風でもなく「うん、大丈夫」と言って笑った。

その表情に、切れかけた豆電球を連想して、おれは目をそらす。このまま姉ちゃんを見ていたら、知らなくてもいいことまで見えてきてしまいそうで、それが怖かったからだ。

人はいろんな顔を持っているという。おれにだって、それがどういうことなのかはわかる。

姉ちゃんの本名は「望月渚」で、おれにとっては「姉ちゃん」ではないけど、父さんや母さんの前では「娘」で、先生の前では「生徒」。いろんな名前があって、それに合わせた顔がある。当たり前だ。そんなことはわかつてる。

だからこそ、おれは「姉」以外の姉ちゃんを知りたいとは思わない。

職場先での「部下」だったり、「後輩」だったりする「望月渚」が、背中を丸めて、ここにいない誰かに平謝りする人間だというのが、

なら、おれはその姿を知ってはいけないような気がしてならないのだ。

「なんて顔してんのよ」

ふいに姉ちゃんはおれを見て笑った。

「司、今考え込んでますって顔、してたよ」

なんだよ、誰のせいだと思ってんだよ、そう言おうとしてやめた。こつちを見ている姉ちゃん表情は、いつもどおりのものだったから。

ちよつとずれてて、おれを振りまわしてばかりで、そしてジエツト機の軌跡のようにまっすぐな、おれの知っている姉ちゃんだったから。

「大丈夫だって。私は、ちゃん仕事はやって来たから。今は休暇。休みなのよ。労働者にも、実家でくつろぐ権利はあるわ。学校で、習わなかった？」

「ふーん。姉ちゃんにも労働者なんて大層な名前が付くんだ。それは知らなかった」

「失礼ね。盆と正月も返上して、何年も帰省せずに健気に働く人間に、他にどんな名前がつくってのよ」

「知らねーよ。姉ちゃんは姉ちゃんだろ」

おれの投げやりとも取れる言葉に、姉ちゃんは不意を突かれたかのように押し黙った。おれもまさかそんな反応をされるとは思っていなかったなので、図らずも二人して黙り込んだ。

鏡を見たわけじゃないけど、おれ、今姉ちゃんがしているような間の抜けた顔をしているんだろうな。

先に笑いだしたのは姉ちゃんだった。

「言うじゃん、司」

何がだよ、とは言わなかった。なんとなくんだけど、お互い会話の間に同じことを考えていた気がしたのだ。

姉ちゃんは姉ちゃん、つまりおれの姉だ。この事実動かない。でも、姉ちゃんにとっては違うはずだ。「姉」なんて、自分に付

いたたくさんの名前の一つでしかない。

でも、本名はある。「姉ちゃん」でも「労働者」でもない、自分の名前が。

自分は自分、他の何者でもない。当たり前のようにいて、これっ
てけっこう忘れてしまいがちなことなんじゃないだろうか。

少なくとも、姉ちゃんの反応を見て、おれはそう思わずにはい
れなかった。

「プール、膨らんだ？」

「とっくに」

「そう、ありがとう」

立ちあがり、ドア付近に立っているおれとすれ違うように出て行
こうとする姉ちゃんが、ふいに立ち止まった。

「なんだよ」すぐ近い場所で止まるものだから、姉ちゃんの顔
が近い。そこで初めて、薄く化粧をしていることに気付いた。

今さらだけど、姉ちゃんももう化粧をするような年齢になっ
たんだ。

「司、背、伸びた？」

「えっ」

「だって、前は私の方が目の位置高かったじゃない？今、司の方
が目線高い」

言われてみてようやく気付いた。いつの間に追い抜いていたんだ
ろう。

「あー、なんかム力つく。もっと牛乳、飲まなきゃダメかなー」

「なんだよ、おれの方が高くて当然だろ。むしろ高校生にもなっ
て姉ちゃんより小さいんじゃないよ」

姉ちゃんは女子にしてはけっこう背が高い方だったから、別に追
い抜けないからと言っておれが特別チビということにはならないけ
ど、男子として生きようだいは抜いておかなきゃいけないような気
はしていた。

「なによ、その余裕。昔は、姉ちゃんなんてすぐ追い抜いてやる

って、肩並べるたびにムキになってたのにさ」

たしかにそんな張り合いをした覚えがある。おれが一方的に姉ちゃんに對抗心を燃やしていたから、張り合いという言い方は間違っているのかもしれないけど。

「私、縮んだのかな」

姉ちゃんがぽつりと言う。ほとんど独り言だった。

「やだね、年をとるって。成長から遠ざかっていくみたい」

おれより少し低い場所にある顔は、汗ではがれた薄化粧からうつすらクマを覗かせていた。年をとる、という言葉がふいに現実味を帯びて姉ちゃんにのしかかってくるのが見えた気がして、ぞつとした。

さつき電話していたときに見せた小さな背中と、それを隠そうとした弱弱しい笑顔がふいによぎる。

「おれが伸びたんだよ」姉ちゃんの小さな声をかき消したくて、自分でも驚くほど大きい声を出していた。

きょんとしている姉ちゃんに、おれは言わずにはいられなかった。

「縮んだって、なんだよ。おれが大きくなったの。べつに姉ちゃんが小さくなつたわけじゃないし。姉ちゃんがそんな調子じゃ、おれ、抜いたって嬉しくないじゃん。おれ、姉ちゃんを抜くのが目標だったんだぞ」

言いたいことが伝えられたような気がちつともしなくて、もどかしくて腹が立った。

昔はたしかに姉ちゃんを追い抜きたかった。でも、同時に、いつまで経っても抜けないだろうなとも思っていた。

だって、姉ちゃんはいつもおれのずっと先にいる人だったから。意地になったり、ため息をつきながらも、おれはその背中をずっと追っていたかった。

姉ちゃんが先を走ってたから、おれはこれから目指すずっと先の場所に辿り着きたいと思えた。

先回りしておいて、「ここにはいいもの、何もなかったよ。あんたはこれから通るの？悲惨だね」なんて言うのはずるい。

姉ちゃんにはいつも、今の自分に自信を持っていてほしい。

そう望んでしまうことは、自分勝手なことなんだろうか。

「そうだね」

おれの思考を読みとったかのようなタイミングで言われた一言につられて、姉ちゃんと目が合う。意識していないうちに目をそらしていたようだ。

「司は、大きくなった」

姉ちゃんはおれとの身長差を確かめるように、ちょっと上を見て笑う。

「とつても、大きくなったね」

のんびりした姉ちゃんの口ぶりからは、喜んでくれているのをちゃんと感じた。

だから、同じくらいの寂しさが含まれていたことは気付かないふりをしよう、そう思った。

教訓その一、年上のきょうだいは容赦がない（後書き）

ここまで読んでいただいてありがとうございました。感想いただけると嬉しいです。

教訓その二、夏の日差しの下では利口でいられない

ビニールプールに水を張る賑やかな音を聞き流し、おれは部屋に戻って勉強を始める。

少年老いやすく、学成り難し。受験生になってからは、すごく時間経つのが早くなった。

まだ覚えていないことが多すぎるのに、たくさん問題を解いてはバツ印を自分に増やしてく。正直、すごく気が滅入る。

こんだけやっても、実際試験に出るのは1%程度っていうんだから、やってらんないよな。

そうわかっていても参考書から目を離せないのは、根性があるというべきか、諦めが悪いというべきか。

そんな雑念も、問題の趣旨を飲み込み、解答へのプロセスを自分で組み立てていくうちに消えていった。

自宅学習のスタートは理数系の科目がいいと聞いたので、物理から始めるようにしている。物理は センスが一番問われる科目だというけど、おれはわりと好きだ。筋道立てて考えれば、ちゃんと正解が出る。

その点、国語や英語のような言語系の科目はいくらでも化けるし、肝心なことがすぐさりげない表現でさらりと書いてあったりする。それに、こっちのペースで考えることが出来ない、というのがどうにも好きになれない。

人間味があると言えば聞こえはいいけど、誰かが好きに書いた文章を、読み手であるこちらが一生懸命になって理解しようとするのは、なんだか腑に落ちない。

だから、という言い方は言い訳がましいのかもしれないけど、「姉ちゃん」はおれの苦手分野ということになる。

「…今度は、何」たったこれだけの短い言葉を発するのに、こんなにエネルギーを使うのかと呆れるくらい、疲れた。

「何、なんてすぐ聞かない。あんた、仮にも受験生でしょう。受験生は、考えるのが仕事。わからない問題が出たからって、試験官は親切に教えちゃくれないわよ」

ようやく勉強に集中し始めたところで急に庭にひっぱり出され、子ども用のビニールプールと25歳の姉を目の前にして、いったい何をどうしろと言っのたろう。姉ちゃんの物言いにおれはくらくらした。

そういえば、今日は真夏日だって、天気予報で言ってたっけ。そんなことをぼんやり思い出した。おれ、何やってんだらう。

ぼうつとしているおれにしびれをきらした姉ちゃんは、やれやれといった感じで首を振ったあと、ぽつりと言った。

「この水、どうしたらいいのかな」

「は？」

「ほら、プールに水張ったものの、後始末が、よくわかんなくて流すにしてもうちの庭、コンクリート製だから水たまりになっちゃうし。放っておけば蒸発するんだらうけど、これだけの量だと何日もかかるだらうし、それまで置きっぱなしにできるほど、うちの庭、広くないでしょ。邪魔になるし」

「まあ、そうだね」

「では司くんに問題です。ビニールプールに張られた水は、どうすればいいでしょう？」

おれは、今度こそ目まいがして座り込んでしまった。これは真夏日の日差しがせいじゃない。それだけはわかった。

「だいたいさあ、なんで片づけ方も知らないのに、プールを広げようなんて思ったわけ」おれは脱力感と倦怠感を少しでも体から出してしまおうと、ため息をつきながら言う。

「うーん、物置あさってたらこのプールが出てきたから、ちょっとやってみたくなくて」

「あんた、ビニールプールをちょっとやってみたくなる年じゃないだろ……」

「だって、私、ビニールプールなんてやったことなかったし」

「嘘つけ。おれは、これで遊んだ覚えがあるぞ」

「ほんとよ。これ、私が家にいたときにはなかったんだから」

嘘つけ、とまた言い返そうとして、思い出した。

そういえば、父さんが福引きでこのプールを貰ってきたとき、姉ちゃんはすでに家を出ていた。まだぎりぎり小学生だったおれがちよつと遊んで、すぐに使わなくなって、それっきり物置にしまい込まれたんだっけ。

「ビニールプールなんて、でかくなってからやったって、楽しくないだろ」

自分だけ遊んだことがあるというのは、やっぱり少しだけ後ろめたくて、おれの声は小さくなっていた。

「そりゃね、小さい体の方が楽しめるんだろうけど、なんか、今やりたかったのよ。大きくなった、この体でさ」

「何それ。意味分かんないんだけど」

額からまた一滴、汗が流れた。さっきからおれの体力は水分となつて出て行くだけの一方通行だ。戻って来ない。

並々と水を張られたビニールプールは、真夏の太陽を反射してきらきらと輝く。この光に手を入れたら、どんな感覚がするんだろう。気付いたら、片手を突っこんでいた。透明な色を裏切らないような心地よさにつられて、もう片方の手も入れる。

「あ」つぶやいていた。「けっこう、気持ちいいかも」

「でしょう？ やっぱり、夏はプールなのよ」

我が意を得たりとばかりに胸を張る姉ちゃんの服装はさつきと変わっておらず、腕と足の部分のそでがまくられているだけのところから見ると、姉ちゃんもどうせおれと同じように手や足をちよつと浸した程度なんだろう。子ども用のプールで、大の大人が一人で出来ることなんてたかが知れてる。

そこまで考えたら、プールに浸していた手を水の中で併せ、姉ちゃんに向かって放っていた。

水をかけられた姉ちゃんは一瞬、すごく驚いていた。まさかおれが水遊びみたいなことをするとは思わなかったんだろう。おれだつて、手を突っこんだ段階では、まさかこんな子どもつばいことを自分でやるとは思わなかった。

ただ、夏の太陽の日差しをいっぱいに浴びた、この光の結晶のような水を浴びたら、何かがきれいに流れ落ちるような気がしたのだ。姉ちゃんを覆っていた、何かが。

かけてから目が覚めるように、冷静になった。何をやっているんだ、おれは。

姉ちゃんがきょとんとしているぶん、余計にきまりが悪い。我ながら、いったい何を考えていたんだと責めずにはいられない。夏の暑さにあてられてしまったんだ、そうとしか思えない。

ばしゃつという音がして、おれは自分が水をかけられたことに気付く。そしておれに何か言う隙を与えずに2回目3回目の水飛沫が飛んでくる。

「あんたから先にやったんだからね、覚悟しなさいよ」

言葉の乱暴さとは裏腹に、姉ちゃんは楽しそうだ。やっぱり、一人でプール遊びはつまらなかったんだろう。

おれは「ちよつ、顔はやめろよ」と言っただけなのに、姉ちゃんに顔を重点爆撃された。たかが水遊び、という遠慮は一切ない。

狭い庭を逃げ回りながら、おれはこのビニールプールで遊んでいたときのことを思い出していた。

姉ちゃんも、このプールで遊びたかったかなと、幼心に気がかりだったんだつて。

その頃に戻ることは出来ないけど、これで勘弁してよ。

水飛沫の向こうで笑う姉ちゃんを見て、自分のなかでくすぶっていた「7年前のおれ」は、少しだけ頷いてくれた。

教訓その二、夏の日差しの下では利口でいられない（後書き）

季節外れなのはわかっています。

教訓その三、聞いただけじゃわからないけど聞いてみてもわからない

チャイムが鳴って、教室に音が戻ってくる。

テスト中というのは、どうしてあんなにも押し殺したような音しか聞こえてこないんだろう。

鉛筆が焦りながら紙の上を走っていく音、消しゴムが自分をすり減らしていく音、行くあてのないため息しかなかったさつきまでとは違い、今はいろんな音がある。

肺の中の空気をそっくり入れ替える空気の流れや、判別しきれないたくさんのおしゃべり。

人間が、ここで生きて活動しているのだとたしかにわかる音が溢れるこのタイミングが、おれはけっこう好きだ。安心する。

「司、飯にしようぜ」

鳥羽が、移動するたくさんさんのクラスメイトの流れに逆らいながら、近くにある椅子を引き寄せて来る。片手には、いつも通りコンビニの袋を提げている。

「いやー、ようやく終わったな、実力テスト」開放感のあるセリフに反して、鳥羽の表情はそんなに嬉しそうじゃない。

受験というラスボスを控えた今、夏休みの夏期講習での実力テストなんて中ボスをやり過ぎたくらいでは、手放して喜べない気持ちにはよくわかる。

「大門3の最後の問題、わかった？」おれは鞆から弁当を取り出しながら鳥羽に尋ねる。どうせすぐに解答が配られるけど、誰かと答え合わせしたくなってしまうのが、受験生の悲しいところだ。

「さつきの科目、社会だろ？おれ、たぶん司と違う科目だぜ」

「えっ、鳥羽、地理じゃないの？」

「おれ、倫理。なんか、地理って性に合わなくて」

科目に性が合うとか、あるんだろうか。

おれの疑問に気付いたのか、鳥羽は「ほら、世界中の地名をちま

ちま覚えてくのつて、面倒じゃん？」と付け加える。

鳥羽には「重人」という立派な名前があるのに、「重くておれに合わないから」という理由で、文字通り軽い名字を呼ぶように強要してくる。

たしかに鳥羽には、女子を含め誰とでも気軽に話せるようなノリの良さがあるけど、本人が思っているほど「軽い人間」ではないというのがおれの見立てだ。指摘すると不機嫌になるので言わない。まったく、照れやすい人間というのは面倒くさい。

「倫理だつて、思想家の意見とか全部覚えなきゃいけないんだろ？ 同じくらい面倒だと思うけど」

おれと鳥羽は理系だから、志望校によってまちまちだけど、社会系の科目は一つ取ればいい。

おれの周りではその一枠に地理を選ぶやつがほとんどだった。地理は小学生の頃からやってきた基礎があるけど、倫理は高校になつてから始めて手をつける科目だ。とつつきにくい、という気持ちがある人間が多いのは自然なことだろう。

「おれも2年のときに倫理やったけど、なんか、厄介な科目じゃね？ 抽象的っていうか、よくわかんなかったし」

日本史のように事実を学ぶのならわかるけど、「おれはこう思うんだよね」という一個人の意見を延々と覚えていくあの科目を続けしていくのは、「昨日、こんな夢見たんだよね」と語られるくらい、反応に困る。「はあ、そうですか」という感想しか出てこないのだ。「それでもないぜ。おれ、けっこう倫理、好きだし」

鳥羽は菓子パンを手で千切りながら笑う。

パンを千切って食べる男子を、おれは鳥羽の他に知らない。おれは、そんな鳥羽の品の良さを買っている。

「そうか？ おれはどこが楽しいのか、全然わかんないんだけど」
「楽しいって言うより、面白っていうのに近いかな。ソクラテスって覚えてる？」

「まあ、一応」

本当は、せいぜい「初めて聞いた名前ではないな」という、ずいぶん頼りない記憶でしかない。

倫理の先生が「倫理の教科書の中で一番有名な人だからな」と言っていたけど、おれにとっては先生がその直後にしたデカいくしゃみの方がずっと印象的だった。

「おれ、ソクラテスが教科書の最初の方に出て来たから、倫理好きになったんだよね。授業について先生に質問しに行ったのなんてそれまでなかったのに、ソクラテスだけはどうしても気になっちゃって」

授業の大半を夢の世界で受けている鳥羽にそこまで言わせるソクラテスって、いったい何者なんだろう。

一応授業は寝ないで受ける主義のおれが鳥羽に素直に聞くのは抵抗があったから、わかったようなフリをして少しずつ情報を拾っていくことにした。

「ソクラテスの何がそんなにいいんだ？おれ、特に印象に残らなかったんだけど」

鳥羽はちよつと考えるような間を空けてから「性格？」と自信なさそうに言う。

会ったこともない人間の性格を好きになれるって、いったいどういう理屈なんだろう。

おれの不審が露骨に顔に出ていたのか、鳥羽は「やっぱりわからないよな、こんな説明じゃ」と、困ったように笑った。

「でもさ、知ったかぶりしないのって、かつこいいと思うんだよね、おれは。だからかな、惹かれ たんだと思う」

鳥羽はおれがソクラテスを知っていることを前提に話しているせいか、理由をずいぶん端折っていた。

おれがこの説明から得られたソクラテスの情報といえば、「とても謙虚な人らしい」ということだけ。それだけで倫理という科目自体好きになれるなんて、鳥羽の考えることはよくわからない。

でも、好きなものを誰かにわかってもらおうと言葉を選びながら話

す鳥羽の姿は、なんだか眩しかった。

おれは、こんなふうに人に自分の考えを共有してほしいと思えるほど、勉強に入れ込んでいない。

倫理だろうが地理だろうが、他のすべての科目も、おれにとっては「受験に使うもの」でしかないのだ。

受験が終わったとして、おれは今必死になってやっている勉強を、ただ「すごくしんどい思い出」としか思えなくなっているんだろうか。

自分から戻ってくる答えが、決しておれを前向きにしてくれないことがわかっていたから、おれは鳥羽に視線を戻す。

「先生に質問に行ったらって言ってたよな？何を聞きに行ったわけ？」

言いながら、教科書とノートを胸に抱えて一人職員室に入っていく鳥羽を想像してみた。

授業中に決して目が合わない類の生徒が「ここ、もっと詳しく聞きたいんですけど」なんて真面目くさって言ってきたんだから、先生はさぞかし驚いただろう。

そんな光景が目に見えかねたから、おれは鳥羽の一言に、すぐには反応出来なかった。

「良く生きるって、どういうことですかって、聞いた」

鳥羽は、「空はどうして青色なんですか」と尋ねる子どものように、おれを何も言えなくさせた。

余計なものが何も着いていない、ただ純粹に「不思議だ」「知りたい」という欲求しかそこにはないのがよくわかるだけに、ヘタな一言で台無しになってしまいそうな脆さがあって、それがおれから「冗談で流す」とか「知ったように言ってみる」という常套手段を奪っていた。

「司も授業でやったと思うけど、これってソクラテスの言葉なんだ。おれバカだから、どういう意味なのかわかんなくてさ」

鳥羽はふいにおれから目を逸らすと、窓の外に広がる真っ青な空

を仰ぎ見る。そこに答えを探そうとしているようにも見えたし、宇宙に繋がっている空の奥行きに、ただ呆然としているようにも見えた。

ソクラテスがどんなやつなのか未だにわからないけど、おれは鳥羽と違って、そいつのことを好きになれないような気がする。

良く生きること。充実した人生にしろってことなのか、悪いことをするなという意味なのか。簡単な言葉しか使っていないぶん、どんな意味にも取れるじゃないか。それって、なんだかずるい気がする。肝心な部分を教えてくれないなんて。

毎日、それこそ夏休みにもこうして勉強するために学校に来て、「もうすぐ受験だ」とあくせくしているおれの生活は、たぶん世間のほとんどの人から見て充実していると言えるだろう。悪いことも特にしてない。

受験が終わって、大学生になって、就職して、ネクタイを自分で絞められるようになったら、おれはその後どうするんだろう。

きっと、今日鳥羽と話したことも、ソクラテスなんて大昔に死んだおっさんのことも思い出すことなんてなくて、ただ今と同じように、別の何かに追われるようにあくせくしている。きっとそうだ。今までが、そうだったんだから。

「受験生」から「大学生」、「社会人」へと名前を変えていく中で、おれは今の疑問を覚えていられるのだろうか。

何もかもが急ぎ足で変わっていく中で、会ったこともないおっさんの言葉と、その言葉に何かを見出そうとした友だちと、そいつを羨ましく思ったおれ自身のことを、抱えて進んでいくことなんて出来るんだろうか。

鳥羽はこっちに視線を戻すと、ふいにおれを見て笑った。

「司、今、途方に暮れてますって顔してる」凶星を突かれて何も言えないおれに、鳥羽はあっけからんと続ける。

「司はおれよりずっと頭いいから大丈夫。大門3の答えだって、たぶん合ってるって。心配すんなよー」

「なんだよ、どうせなら絶対って言えばよな」おれはいつもの調子で鳥羽に笑ってみせる。うまく笑えたかどうかは、自信がない。

「バーカ、絶対なんて言葉がそうそうあるかよ」

鳥羽は楽しそうに笑った。腹を立てる気が起こらないほど、その笑顔には清々しさがあった。

「ほら、次の時間、進路面談だぜ。しゃきつとしろよ、司」

チャイムが鳴った。その音に急かされるように、鳥羽は席を立つ。また少しずつ、音が消えていく。

教訓その三、聞いただけじゃわからないけど聞いてみてもわからない（後書き）

倫理の授業は一番好きでした。

教訓その四、広ければいいとは限らない

「失礼します」

一声かけてからドアを開ける。予想していたよりずっと狭い部屋の中の、一つしかない机の向こう側に座っている後藤先生と目が合っ
つて会釈をする。

「とりあえず座れ。今、資料出すから」

先生が机に積まれた書類をめくったり取り分けたりしている間に、おれは初めて入った進路指導室を見渡した。

トイレの個室3個分くらいしかない狭いスペースに、飾り気のない事務机が一つと、今おれたちが腰を下ろしている無個性なパイプ椅子が二つ。この部屋にあるものはそれだけ。先生の後ろ側に窓が据えられていなかったら、さぞかし息の詰まる空間になるんだろうな。もともと、あつたところでこの狭さに何か変化が出るわけじゃないんだけど。

おれの視線がきよろきよろと落ち着きなく動き回っていることに気付いた先生は、おかしそくに笑う。

「望月は、この部屋に入るの初めてだったか。名前のわりに普通の部屋だから、驚いただろ」

「はい、まあ」

普通と言うにはあまりにも殺風景だ。進路を相談するためだけに作られましたと言わんばかりの無駄のない様が、なんだか新鮮だった。

「おれも、あんまり好きじゃないんだよな、この部屋。狭いし、圧迫感あるし」

先生は大きな体を縮めるような仕草をしながら言う。

たしかに、後藤先生には窮屈だろう。

後藤先生に担当してもらっていない生徒は、ほぼ全員先生を体育教師だと思っている。がっしりした体躯と、体育祭で誰よりも張り

切っている姿を見れば無理もない。授業で滑らかに古典の活用形を暗唱しているのを見てきていなかったら、おれも未だに国語の先生だと納得できずにいたに違いない。

「望月は第一志望、決めたか」

「はい、一応」おれは用意しておいた学校名を口にする。おれの成績ならなんとか狙えるところにある国立の大学だ。

先生も、手にした資料を見ながら頷いてくれる。おれのこれまでの成績や模試の結果なんかが書かれているであろうその資料には、おれの身の丈にあつた希望を否定する材料にはならないから、予想どおりの反応ではある。

「まあ、望月は授業も真面目に受けてるしな。今の調子で頑張れば、行けるだろ」

先生の肯定的な言葉に、おれの体から力が抜ける。知らず知らずのうちに力んでいたみたいだ。

「もちろん、油断は禁物だぞ。あくまで、今のペースを維持できればの話だからな」

先生は念を押すように言いながらも、表情は柔らかかった。つられるように、おれも笑った。緊張がほどけると、人間というのは笑ってしまう仕組みになっているらしい。

「ところで、どうしてこの学校を志望したんだ？」

「国立がいいんです。私立は学費、高いんで」

「そうじゃなくて、この大学がいいと思った理由だよ」

先生はあくまでも穏やかに言った。おれが先生の質問の意味を勘違いしているとしても言いたげに。「望月の今の答えじゃ、学費以外に選考基準を持ってないと取られかねないぞ」言葉に詰まった。凶星だったからだ。

それでも、なんとかそれらしい理由を言わなければと、おれは口を動かす。

「それは、おれの取ってる科目が受験科目として優遇されていて、有利だから……」

「それじゃ、目指す理由にはならないだろ。学費が安くて、入れそうだったから選んだってことになる」

先生と目が合う。笑ってはいなかった。

おれは自分の図星がとつくに見抜かれていることによつやく気付いた。

「べつに、責めているわけじゃないんだ。自分の努力に見合っていない学校の名前を大っぴらに言えることが美德ってわけじゃないからな。望月の選択は現実的だし、親に負担をかけないように考えていることは偉いと思う」

眉間にしわを寄せ、言葉を慎重に選んでいる先生が、とても寂そうに見えたのは、なぜだろう。

「だがな、『入れるから入る』じゃないんだ。『入りたいから入る』。そうじゃなきゃ、義務教育を終えた後にも学生を続ける意味がないだろ」

先生は、諭すような穏やかな調子を変えなかった。それが辛かった。自分がどんどん小さくなっていくみたいで、このまま消えてしまえる気がした。

「たしかに、今は大学全入時代って言われてるし、名前さえ書ければ誰でも大学生になれる。望月は真面目に勉強している方だし、そこそこの大学には入れるだろう。でも、入るだけでいいなら、学生を続ける意味はないとおれは思う」

先生はパイプ椅子の背もたれに大きな体を預け、椅子が大げさな音を立てる。この部屋には、今この音しかない。

「自分で考えて、自分で決めるよ。学費とか、レベルがどうかは、その後で考えることなんだから」

先生はそう言って、大きく伸びをしてから「それにしてもこの部屋、本当に狭いな」とつぶやいた。

面談が終わってから廊下に出てみて、たしかに進路相談室は狭かったなと実感した。

窓がいくつも並んだ廊下は比喩物にならないほど開放的だし、い

そんな場所からいろんな音が聞こえてくる。
その広さが、今のおれにはたまらなく鬱陶しかった。

教訓その四、広ければいいとは限らない（後書き）

私の母校の進路指導室はやけに狭かったです。他の学校もそうだとは言いませんが。

教訓その五、どうしても知りたいのなら人に聞くことをためらってはいけない

家の玄関のドアを開けると最初に目に入ってくる、奥までまっすぐ伸びる廊下。その一番奥に面しているところにおれの部屋、つまりおれしか使わない部屋がある。

その一番奥のドアが開け放たれていた。

「…何やってんの」

「司、あんた、帰ってきたら最初に何か聞かずにはいられないわけ？もつと他に言うことがあるでしょう」

「ここ、おれの部屋なんだけど」

足を崩して座り込んでいる姉ちゃんの足元は、ゴミともガラクタともつかないもので散らかっている。押し入れが開いていることから考えると、そこから引つ張り出てきたんだろう。

「懐かしいでしょ、お母さんが取っておいてくれたみたい」

姉ちゃんは自分の周りに並べた小学校の頃の通知表だの運動靴だの、もう絶対に使わないと断言出来るものたちを見渡して嬉しそうに言う。「思い出は大事じゃない」と言い張って、なぜかおれの部屋にそれをため込んでおくスペースを設けた母さんの表情そっくりだ。やっぱり、親子って似るんだな。

「思い出に浸るのは結構だけど、おれの部屋なんだから勝手に漁るなよな」

「あら、もともとは私の部屋じゃない。私が家を出た後にあんたが使い始めたんだから、いわば 私が貸主なのよ。それとも、見られたら困るものでも隠してたわけ？」

突っ立ったままで目線の合わないおれを仰ぎ見た姉ちゃんは、にやにやしていた顔をふと真顔へと変えた。

「あんた、夏期講習行くとか言ってたけど、マラソン大会でもやってたわけ？」

姉ちゃんの真っ直ぐな目から逃げるように、おれは鞆を下ろすつ

いでのように視線をそらした。

「こんな暑さの中でマラソンなんてやったら死んじまうだろ。職業柄、そういうのはわかるんじゃないの？」

「それは、そうだけど」姉ちゃんは珍しく口ごもるような間を空けてから、独り言のように「ずいぶん疲れた顔してるから」と漏らした。本当に、口の間からうつかり出てしまいましたと言わんばかりの、不本意さを滲ませて。

「受験生なんて、みんなマラソンランナーみたいなもんだろ。常に誰かと張りあってたんだから」

おれは軽い調子で言い返し、立ちあがった姉ちゃんの横を素通りしてデスクチェアに腰を下ろす。

座ってから、自分がすごく疲れていることに気付いて驚いた。立っていたさっきまでは何も感じなかったのに、もう足に力が入らない。

自分の足で立っていないというのは、今のおれには笑い出したいくらい素敵なことに思えた。

行き場所を決めて、あるいは踏みとどまる理由を抱えて、自分の動力を頼りに生きていくのって、途方もないエネルギーを使う。一度止まると、それがよくわかる。

「じゃあ、司は今、走っているわけだ」姉ちゃんは何かを含ませるように、ゆっくりと言った。行間を読めと授業で怒鳴っていた後藤先生の声が、ふとよぎる。

「止まってるけど、見ての通り」

茶化すように、おどけて言った。柄にもなくマジになってる姉ちゃんを笑ったつもりだったのに、おれ自身がダメージを受けて、視線がまた下がる。

自分の足で踏ん張る力もなく、行きたい場所もない、今のおれ自身を、おれは笑いたかったのかもしれない。

そう思ったとたん、おれをなんとか支えていた背骨まで仕事を止め、おれの全体重を引き受けさせられたデスクチェアが悲痛な音を

上げる。

疲れた。体に力が入らない。

今まで自分の重心を支えていたものが何だったのか、忘れちゃったみたいだ。

背もたれにだらしなく寄りかかると、重い頭は垂れ、自然と目線は上にいく。表情のない天井に 視界が遮られ、他に何が見えるわけでもないのに、視線を何かに逸らすことはひどく億劫だった。特に見ていたいものなんて、ない。この楽な姿勢を動かさなくなかった。おれはいつたい、どうやって立ちあがって、これから歩いて行けばいいんだろう。

「そうだね、止まってるね」姉ちゃんは笑わなかった。さっきまでの強張った表情も、今はない。

「また、走り出せそう？」

「そりや、そのうちはそうしなきゃならないんだろうな」おれは天井に顔を向けながら投げやりに言う。「ずっとこのままってわけにはいかないだろうし」

そう言いながらも、本当にそう出来るか自信がなかった。

別に行きたい場所があるわけじゃない。この部屋は狭いけど、自分の足を酷使してまで出て行きたいと思えるほどの何かを、おれは知らないんだから。

さっきの後藤先生の寂しそうな顔が浮かんで、それから逃げるように、おれは姉ちゃんの方に首をひねる。

「で、姉ちゃんは何やってんだよ。押し入れなんて、昔のものしか入ってないだろ。中のものこんなに引っぱり出してきて、今になって学生時代の運動靴でも必要になったわけ？」

「ちよつとね、探し物」姉ちゃんは自分のまわりに散らばった書き初めの紙やケースに入ったりリーダーなんかは順番に視線を配ってから「昨日物置も見ただけど、見つからなくて」と途方に暮れたようにつぶやいた。

昨日の人騒がせなビニールプールは、探し物の最中に出て来たと

いうことか。呆れたけど、ようやく納得した。存在すら知らなかったはずの物を見つける過程は、一応あったわけだ。

「卒業アルバムなら、たぶんここにはないぜ。母さん、一応おれが使いそうなものを集めたみたいだから」

もつとも、それは母さんの基準であつて、この部屋が明け渡されてから１年ほどで中学生になったおれに、リコーダーや書道セット、小さくて履けなくなった運動靴なんて必要ないのだが。

姉ちゃんは打ち明けるのをためらうように視線を泳がせる。そして自分が出してきた物の圧倒的な量を目の当たりにして、このまま一人で探しても仕方ないと観念したのか、おれから目を逸らしながら「書類っていうか、紙、なんだけど」とようやくそれだけ言った。

「紙？卒業した後にも必要な書類なんてあんの？」

「だから、書類じゃないんだつてば」姉ちゃんは不機嫌そうな低い声を出すけど、恥ずかしがっていることがなんとなくわかった。見られちゃ困るものってことか。ラブレターの類なのかもしれない。

「紙っぽいものは、たしか上の段にまとめられてたはずだけど」

「知ってる。一つだけ白っぽい色の箱に、でしょ？」

姉ちゃんの指さした先には、たしかにおれの示した段ボール箱がすでに開封され、内容物が箱を取り囲むように出されていた。あまりにも物が多かったから気付かなかった。

「教科書くらいしかなかったわよ」

姉ちゃんが非難を込めておれに突き付けて来たその一冊に、おれは「あ」と思わず声を漏らした。

「何？司の世代って、倫理やらないわけ？」おれの反応を不審に思った姉ちゃんは、手にした教科書をまじまじと見る。「時代って変わるのねえ」

「いや、今も倫理はあるよ。おれが取ってないだけ」

姉ちゃんから半ば取り上げるように、古びて端々が黄色くなっている教科書を受け取る。

「何？倫理に興味あるの？」おれがページの隅々に素早く目を配っている様子に驚いたように姉ちゃんはきょとんとしている。

「いや、興味があるって言うか」索引を引いた方が早いことに気付いたおれは、一度閉じてから後ろの方を表にして、またページをめくる。「友だちと倫理の話したときに出た名前、わかんなくてさ。なんか、悔しいじゃん、そのまま放っておくのって」

「何て名前？」

「ソクラテス。倫理の教科書で一番有名な人だって言ってたけど」姉ちゃんは心当たりがあつたようで、「ああ、ムチノチの人か」と嬉しそうに言う。7年も前に学生をやめた姉ちゃんに、去年まで取っていた科目で後れを取っていることが判明してしまったわけだけど、今はどうでもよかった。

「ムチノチ？どういう字？人種？まさか国の名前じゃないよな」現役で地理を取っているおれは、そんな地名は知らない。

「無知の知。何も知らないの『無知』と、知っているの『知』で『無知の知』。地名じゃなくて、座右の銘みたいなもんかな」

ますますわけがわからず、首を捻らずにいられないおれに、姉ちゃんは得意げに説明してくれた。

「ソクラテスはね、神殿から『ソクラテス以上の賢者はいない』ってお告げを受けたの。神様から世界一のお墨付きを貰ったんだもん、そりゃ驚くわよね。で、ソクラテスはその大それた言葉を否定してくれる誰かを探しているんな知識人に会って話をするわけ。世の中にはこんなにも物知りな人たちがいて、神様が言うような人間は決して自分のことじゃないって、納得したかったのね。でも、結局ソクラテスは自分が世界一知恵があるって結論を出すの。有名な政治家や詩人、いろんな分野の職人にまで話を聞いた末に、よ。とんだ傲慢よね」

姉ちゃんはおれの方へと視線を戻すと、「そう思わない？」と、おれの答えを促してくる。

おれが答えられずにいると、姉ちゃんは「でも、実は違うんだな、

これが」と楽しそうに言う。おれが頷かずにいたことを喜んでるのが、なんとなくわかった。

「みんな、知ったかぶりだったの。知ったつもりになってたのよ。ソクラテスの素朴な質問に、筋の通った答えを返せなかったの。ソクラテスはね、自分が何も知らないって自覚があったから、普通の人や、まして自分の知識に自信のある人が素通りしてしまうような些細な疑問を考えずにはいられなかった。疑問が尽きないことを、知識がない結果だと思ってたわけ。そこが、自分の知識量に絶対の自信があった知識人たちとソクラテスの違いだったのよ。つまり、無知の知ってというのは、自分が何も知らないことを知っているってことなの」

姉ちゃんは説明を終えると「何年も前にやったきりだったけど、けっこう覚えてるもんね」と言って笑った。

「ホント、やればやるほどわからなくなることばかりだよね。習ってた頃はピンとこなかったけど」

姉ちゃんはそう言うのと、窓の方に視線を向ける。その向こうに広がる夏の青空は、果てを見せないほど青く、どこまでも続いている。ソクラテスの言葉の意味がわからないと言ったときの鳥羽もそうだった。とても遠いところを見ていた。

おれたたちが本当にマラソンランナーだとして、いったいどこまで走ればいいんだろう。目に見えるゴールは、本当にあるんだろうか。もう誰とも張りあわなくても良くて、自分の足を酷使することもない場所に、いつになったら辿りつけるのだろう。

姉ちゃんはおれよりずっと先を走っている。昔からずっとそうだった。おれの足場には、いつだって姉ちゃんの軌跡があった。それなのに、どうしてそんなことを言うんだよ。

やればやるほどわからなくなるなら、おれは何のために走って行けばいいんだよ。

そう思ったら、おれはもう口走っていた。

「それって、変だよ」

姉ちゃんとまた目が合う。

「何だよ、無知の知って。知らないことを知ってるって、いったい何がそんなに偉いんだよ。知識なんて、あればあるほどいいんじゃないのかよ」

受験が終わればいいと思った。そうすれば、もう「しんどいだけの勉強をしなくてすむから。試されるのも終わりだと思った。」

でも社会人になって働く姉ちゃんという「現実」が、おれのゴールをまた遠ざけた。あんなに大きかった姉ちゃんを縮めてしまう「将来」は、確実に待ちかまえているのに、未だに何を目指して走っていけばいいのかわからずにいる。

「頑張った分だけ何か見返りがあると思っちゃいけないのかよ。どうして進んだ分だけわからなくなっちゃうんだよ。おれたちは、時間が経つほど成長していけるんじゃないのかよ」

おれは今まで自分を納得させてきた「建前」と対極にあるもののおぞましさに身震いした。こんなに醜くて、浅ましい期待が、ずっとおれを形作ってきたなんて、情けなくて消えてしまいたくなかった。

姉ちゃんはしばらく何も言わなかった。当たり前だ。弟に急にこんなことを言われたら、何と言っていいかわからないだろう。

「じゃ、聞きに行こう」

きっぱりと放たれた声に呼び覚まされるように、おれは顔を上げる。

「明日は休みでしょう？司、あんたも来なさい。行けば、何かわかるはずだよ」

姉ちゃんは一人、大きく頷いた。

教訓その五、どうしても知りたいのなら人に聞くことをためらってはいけない

頑張ってください。あとちょっとです。

教訓その六、変わるものばかりではない

家を出たのは、結局午後になってからだった。

「一番暑い時間帯に外出することないだろ」

「いいのよ。あんまり早くに行くのも失礼になっちゃうでしょ」

姉ちゃんもってもらいしことを言うけど、本当は着て行く服が見つからなかった結果だということを、おれは忘れていない。

「とりあえず降りた駅は間違いないはずだけど、道、こっちで合ってるのかな」

「姉ちゃん、一度来たことあるんじゃないのかよ」

「何年も前にね。すっかり様子変わっちゃってるから、初めて通るような感じ」

「そんな調子で、ホントに着けるのかよ」

おれのため息など露知らず、姉ちゃんは遠足気分で歩きまわっている。見知らぬ町で迷子になりかけている危機感など欠片も感じていないのが、傍から見てみるとよくわかる。

家の最寄り駅から電車で揺られること4駅、降りた先は地名なら知っているけど、一度も来たことのない町だった。おれと姉ちゃんは地図もなく、ただ住所が書かれたメモだけを頼りに彷徨っている。

「安曇先生の家に行こう」

昨日、姉ちゃんは重大な宣言でもするような重々しい口調で一言、そう言った。

おれが呆氣にとられて何も言えないしていると、姉ちゃんは「まさか司、先生のこと忘れちゃったんじゃないでしょうね」とひどく顔をしかめた。「男子、マジ信じらんないんだけど」と何かにつけて吐き捨てるクラスの子の表情そっくりだ。

「いや、覚えてるけどさ、でも」おれはとりあえずそれだけ急い

で言ったものの、後に言葉が続かなかった。その先を口に出すのをためらうほどには、おれは先生のことが好きだったから。

安曇先生は7年離れたおれたちきょうだいを、偶然にも両方受け持ってくれた中学校の頃の先生だ。

定年を間近に控えた年齢に見合った白髪頭に分厚いメガネ、ちょっと屈み気味な姿勢、女子によっては見下ろされてしまう小柄な体格。

安曇先生を誰かに説明しようとする、とにかく年寄りで小さい人としか相手に受け取ってもらえないのがちよつともどかしい。

生徒であるおれたちにも敬語を使つて接するような律義さも、年齢に見合わず可愛らしい仕草も、その反面ふと浮かべる、長い間生き続けてきた人しか出せないような穏やかで寂しそうな表情も、言葉にして説明するのはなかなか難しい。

おれも、確認したわけじゃないけど姉ちゃんも、安曇先生のそういう「説明しづらい」特徴が好きだった。

会わなくなつてもう何年にもなるけど、今でも鮮明に先生の姿は思い出せる。

未だに、忘れられずにいる。

「あ、ここだよ。青い屋根にオレンジのポスト！それにほら、表札も安曇だよ、変わつてないなあ」

姉ちゃんのはしゃぎながらおれを手招きする。無事目的地に辿りつけたことには安心していているけど、それを姉ちゃんのように無邪気に喜ぶには時間をかけすぎた。容赦のない日差しは、おれに「母さんに借りた靴なんだから、走ってヒール折るようなことすんناよ」と言う力しか残してくれなかったようだ。

安曇先生の家は和風というよりは「まさに日本家屋」という表現がしっくりくる家だった。玄関口になつてゐる引き戸の前に立てば、すぐ横に控えめな広さの庭が見える。表札の「安曇」の文字は家主

と同じくらいの古さを感じさせているけど、今もこうして役目をしっかりと果たしている。それをじつと見つめていたら、視界の中に姉ちゃんの腕がにゅっと伸びてきた。表札のすぐ隣にあったインターホンを押す。腕時計焼けが目新しい。いつもしているアクセサリーの延長みたいなカラフルな腕時計も、今日の服装にはふさわしくないからという理由で外してきたことを思い出した。

「はい、どなたあ？」

家の奥の方からかけられた声に、思わず背筋を伸ばす。姉ちゃんがインターホンに向かって話そうとしたけど、それを待たずにドアが開けられる。

「あら」

出て来た老婦人は、おれと姉ちゃんを前にして一瞬驚いた様子を見せたあと、ふつと笑顔になった。深い皺がすべてほぐされた、とても柔らかい笑顔だった。

見知らぬ人間がいきなり尋ねて来たことに驚いたんだろう。

その後笑ってくれたのは、おれたちの服装が理由だということとはなんとなくわかった。

学校の制服を着たおれと、この暑さのなか、白いブラウス以外はすべて黒一色の服装の姉ちゃん。女の人が、おれたちを一通り眺めてから浮かべた笑顔は、嬉しそうにも見えたし、それ以上に悲しそうにも見えた。

「主人に用があつて来てくれたのかしら？」

「はい。安曇先生に預かっていただいた物を引き取りに伺いました」

姉ちゃんの言葉に、奥さんらしき女の人は何か心当たりがあるらしく、「ああ」と安心したように頷く。

「上がってちょうだいな。主人に挨拶、していつてくれるでしょう？」

「はい、ぜひお焼香させてください」

必要なことは姉ちゃんが言ってくれたから、おれはただ黙って頭

を下げた。

動いた拍子に線香の控えめな匂いが鼻孔に入って、おれは回れ右をして駆け出したい衝動をなんとかこらえて玄関の敷居を跨いだ。

教訓その六、変わるものばかりではない（後書き）

喪に服す期間は故人との関係にもよるそうなのですが、長くても1年くらいだと聞いた覚えがあります。

教訓その七、自分のことは自分にしかわからない

「望月さん、ね。喪なんてもう何年も前に明けちゃったから、たまに尋ねてくる人たちはみんな普段着なのに、わざわざかしこまった服装で来てくれたもんだから、驚いちゃったわ。この暑さに喪服の黒は大変だったでしょう」

奥さんである悦子さんに居間に通され、お互い自己紹介を終えりと、まずそう言われた。

悦子さんの言葉通り、たしかに大変だった。道中ではなく、着るまでが。

帰省中に姉ちゃんが喪服を持ってきているはずもなく、母さんが昔着ていた物を探し出すことに午前中は費やされた。履いてきていたサンダルで出るわけにもいかないから、それ用の靴まで探した。付き合わされたおれの心中を察してくれる悦子さんは、本当に出来た人だと思う。

「いえ、職業柄、こういうのはちゃんとしておきたいんです。何年も経ってから伺って、今さら遅いとは思うんですけど」

姉ちゃんは気まりの悪さを誤魔化すように、出してもらった麦茶を口を含む。おれはひたすら黙って、姉ちゃんの用事が終わるのを待った。

「職業、というのはやっぱり、門出に関わるものかしら？」

悦子さんの言い方はすぐ回りくどかったけど、ちらりと向けた視線の先が先生の写真が飾られた仏壇だったことでピンときた。

「はい、看護師をやっているんです」

姉ちゃんの口調は淡々としていて、自分の言葉に何の感情も出さないようにしているみたいだった。

悦子さんもそれを感じ取ったようで、普通ならこの後に続く「どう？順調？」とか「やりがいのあるお仕事でしょう」というセリフを出して話題を引っ張ることはなかった。

「主人に受け持たれていたのは、いつ頃だったのかしら」

「中学3年生の時です」姉ちゃんの視線を感じて、おれは慌てて「おれも同じです」と付け加える。

「そう。定年も、たしか中学校だったわ。あなたたちは、主人の持った生徒さんの中でも最後の方だったのね」悦子さんはいたずらっぽく笑う。「どう？ボケてたり、物忘れひどかったりした？」

「いえ、本当に、いい先生でしたよ。私、先生の授業のおかげで社会科が好きになったんです」

姉ちゃんは懐かしそうに笑う。倫理の教科書を見て連想しただけあって、先生は姉ちゃんの在学中も社会を教えていたようだ。

居眠りしている生徒がいてもまったく咎めず、のんびり授業を進めていた先生の姿を思い出す。青筋を立てて怒鳴るような人じゃなかったから舐めていたやつらもいたけど、先生は慕われていた。勉強に限らず、「質問」に行く生徒は多かった。おれも一度だけ行ったことがある。特に何をしてくれるわけでもないけど、神社に佇む大木のように、そこにいるだけで人に何か感じさせることが出来る人だったから。

姉ちゃんと悦子さんは、先生の思い出話や、最近のうだるような暑さについて楽しそうに話している間、おれは所在なく麦茶の入ったグラスを眺めていた。

どうしておれ、先生の家に来たんだろう。

姉ちゃんがおれを振りまわすのは今に始まったわけじゃない。だけれど、来る理由なんてよく考えればおれにはないわけだし、断つて家に引きこもることも出来たはずだ。学校があると言えば、姉ちゃんは無理におれを連れてくることはなかったとも思う。

聞きに行こう。行けば、何かわかるはずだよ。

姉ちゃんの言葉に、おれは不覚にも頷いていた。

先生はこの家に限らず、世界中探しても、もうどこにもいない。何年も前から知っていることだ。

それなのに、おれはこの暑さの中、姉ちゃんと一緒に電車で揺ら

れ、知らない町を歩き回り、線香の匂いを嗅いで、ふいに泣きたくなった。

おれは、先生に何か聞きたいことがあるのかもしれない。

「司、お線香、上げさせてもらおう」

姉ちゃんの声で我に帰る。

「ごめんなさいね、長話に付き合わせてしまつて。この年になると、やることなんて家の掃除くらいしかなくて、おしゃべりが楽しくてしょうがないのよ」悦子さんは、笑うと本当に先生の奥さんなんだろうかと思つてしまふくらい若く見えた。

目に入る位置にあつた仏壇の前に座り、おれと姉ちゃんは然るべき手順を踏む。線香に火をつけたり、銅製のお椀みたいなものを棒で軽く叩いて「チーン」と鳴らす際の手順はよくわからなかったから、姉ちゃんに合わせた。

手を合わせ、目を閉じる。瞼の裏は、さっき自分で挿した線香の火が残つているようにちかちか光っている。線香の香りとは不思議なもので、近寄つたからといって強く香るわけじゃないようだ。香りは家全体に均され、ふとした拍子に蘇る。その香りが自分の中に入ってくるのを感じながら、おれは先生に語りかけた。

先生、ご無沙汰してました、おれ、望月司です。忘れられちゃつてるかもしれませんが。お久しぶりです。

先生に受け持つてもらつてから、3年経ちました。また受験生です。

今は後藤先生つていう、先生とは正反対の人に受け持つてもらつています。いや、何が正反対かって言えば、全部なんです。見上げるほど体格いいし、居眠りする生徒がいればチョーク投げてくるし、くしゃみなんて隣の教室まで響くほどデカイし、何かにつけては「根性」って単語使いたがるし、体育祭やりたくて教師になつたんじゃないかってくらい、暑苦しい先生なんですよ。ホント、先生とは正反対なんです。

でも、同じこと言われました。「自分で考えて、自分で決める」

つて。安曇先生、あなたもおれに同じこと言いましたよね。

おれ、わからないんです。自分が何をやりたくて、どこに向かいたくて、どんな人間になりたいのか。全然、わかんないんです。

後藤先生には、国立の大学に行きたいって言いました。学費が安いから。姉ちゃんは大学、行かなかったんです。なんか、高校卒業したら看護師の見習いから始める学校があるらしくて、そこに行きました。勉強もしてましたけど、実際は働いていたも同然です。仕事も勉強も両立して、今では一人前の看護師になれたみたいです。

おれは姉ちゃんみたいに目標があるわけじゃないから、とりあえず大学に進学しようと思いました。学費に拘ったのは、親に負担かけずに見習い生活していた姉ちゃんに引け目を感じていたからだって、わかってます。

おれには、それしかなかった。やりたいこともないから、後藤先生の質問に何も返せなかった。おれには、自分のものが何もない。

もう少し先に行けば、何か変わると思ってたんです。今まで、ずっとそうでした。中学生のときは高校生に、高校生になった今は大学生に、それぞれ期待してたんです。何もないおれにも、いつか何か芯が出来るんじゃないかって。姉ちゃんのずっと後ろをうろろろしているおれじゃなくて、一点をしっかりと見据えて走り出せるときが、いつか来るんじゃないかって。

中学生のとき、おれはあなたに聞きました。「いつになったら、考えなくてよくなるんですか」と。高校受験を控えて初めて進路が割れる場面に立たされて、自分で選んで進んで行かなくちゃならないことに、途方に暮れていたから。

「いつになったら、と聞かれれば、『いつまでも』と答えるしかありませんね。僕たちは自分として生きていくかぎり、自分で考えて自分で決めていかになくちゃならないんですから」

先生のこの言葉に、おれは今でも向き合えずにいるんです。

「ほら、望月渚さん宛て。ちゃんとあるわよ」

悦子さんは四角いクッキーの箱を開けると、一通の手紙を取り出した。何年も前のものだとも一目でわかる、黄ばんだものだった。

「主人に言われてたの。いつかきつと受け取りに来るはずだから、必ず渡してくれて。来てくれてよかったわ。あの人ったら、住所も残さずに逝っちゃうんだもの、本人に送れなくて困ってたのよ」姉ちゃんはとても小さい声で「ありがとうございます」とだけ言った。手紙を受け取る手は震えていた。

「10年越しの再会ね。大事にしてね。私が書いたわけじゃないけど」悦子さんは、今にも泣きそうな姉ちゃんに、とても優しい声で言った。

教訓その七、自分のことは自分にしかわからない（後書き）

ありがとうございました。次で最後です。

教訓その八、わからないことは悪いことではない

たたん、たたんと規則的に揺れる電車の中で、姉ちゃんは悦子さんから受け取った手紙を読んでいた。おれはとくにやることもなく、向かい側の窓からの景色を見るときもなしに見ていた。

「私、明日帰るわ」姉ちゃんは手紙を封筒にしまうと唐突に宣言した。「用事も終わっただし」

「用事って、まさかその手紙を探すために帰って来たわけ？」盆も正月も返上して何年も帰省してこなかったのに、という言葉は飲み込んだ。姉ちゃんの横顔が、とてもすっきりしていたから、それだけの力がその古びた手紙に込められていたことは想像できた。納得は出来なかったけど。

「それ、先生からの手紙なの？」

おれの言葉に、姉ちゃんは首を振った。「私の手紙。先生に預かってもらってたのに、昨日まで忘れてたの」

悦子さんの「10年ぶりの再会」というのは、そういう意味だったのか。でも、先生に預ける手紙を預けるって、いったいどういうことなんだろう。

「はい」姉ちゃんはおれに手紙を突き出す。反射的に、それを受け取る。

「今度は、司が預かって。また何年かして私が帰って来たときに、また読めるように」

なんでおれが、と言おうしたおれを、姉ちゃんは「読んでもいいから」と遮った。「たぶん、今度はあなたに必要なだと思うから」

おれは何か言い返してやろうといういろいろ考えて、最後に姉ちゃんの何か吹っ切れたような表情を見て、「ホントに読むからな」とぶっきらぼうに言った。「預かってやるから、たまには家に帰って、父さんと母さんを安心させてやれよ」姉ちゃんは笑った。帰って来てから見せた笑顔の中で、一番姉ちゃんらしい笑顔だった。

10年後の私へ

3年1組 望月渚

こんにちは、10年後の私。元気だった？

この手紙を読んでるってことは、とりあえず元気なんだね。よかった。そうじゃなきゃ、バカバカしくてこの先を書けなくなっちゃうから。

あなたに手紙を書くことにしたのは、安曇先生の提案なの。

「今は会えない相手にどうしても言いたことがあるんですけど、どうすればいいですか」って聞いたたら、「手紙を書けばいいんじゃないかな。文字なら時間の都合に左右されずに伝えられるしね」って言われたの。先生のアドバイスは、毎回ナイスよね。

さて、ここまで読んでわかっただろうけど、「会えない相手」も「どうしても言いたいことがある」相手も、あなた。10年後の私なの。

あなたには聞きたいことが山ほどある。

今、どんな仕事してる？結婚はした？司には身長抜かれちゃった？言い出せばきりがなくくらい、私はあなたのことを知らないの。何も、知らないの。

あなたのことを知りたいと、今までずっと思ってきた。

どんな経緯を辿って私はあなたになったのか、教えてくれたらどんなに楽かなあ。私はもう自分の頭で考えることをしなくていいし、自分の目を凝らして何かを探すことをしなくていいし、自分の足を使って彷徨うこともしなくていいんだよね。何もかも、私のすべてを自分以外の誰かに任せてやり過ごしていけるのなら、こんなに楽なことはないと思う。考えることも、何かに目を凝らすことも、歩いて行くこともすべて、命をすり減らすことだと、私は思う。

安曇先生にそう打ち明けたら、「確かにそうですね」と言ってくれた。「でも、それじゃただ生きてるだけだ」とも。

「ただ生きるのではなく、良く生きること」

何かの標語みたいなこの言葉は、昔の偉い人が言っていたんだって。高校生になったら習いますよって、先生は笑って教えてくれた。その場ですぐに教えてくれればいいのにね。私がしつこく食い下がっても、結局先生はただ微笑むだけで教えてくれなかった。

ただ生きるのではなく、良く生きること。これって、どういう意味なんだろう。今の私には、その意味がよくわからない。

あなたなら、知っているかもしれないね。もう高校は卒業しただろうし、何かの授業で習ったと思う。

でも、不思議なことだね、その意味をあなたに聞きたいとは思わないの。だって、面白くないじゃない。先生が私に教えてくれなかった理由も含めて、自分で考えていきたい。

あなたが今の私をどう思うかはわからない。くだらないことにどうしようもないほど悩んでいることに呆れているかもしれないし、「どうしてもっとこうしてくれなかったんだ」ともどかしい気持ちでいるのかもしれない。

でも、私はあなたに今の自分を採点してもらおうとは思わないの。私は私で進んでいくから、あなたはそのときの自分のために全力を注いでほしい。

あなたが今、何か辛い事情を抱えていたとしても、それは今の私のせいじゃない。すべては「今」のあなたのせいだよ。「今」なんてすぐに過去のことになっちゃうけど、それでもいつだってそのときが「今」だから、あなたはあなたの「今」のために頭を使ってほしい。目を凝らしてほしい。歩き出してほしいよ。

私にはわからないことだらけで、昔を振り返っては「あのときはのんきだったな」と羨ましがったり、先の見えない不安に駆られて立ちすくんだりする。あなたにはそうなってほしくない、とは言わないよ。あなたは私だから、同じようなことをしている。そんな気がする。私、方向音痴だから、あなたも何度も迷子になったんだろ

うな。

それでいいんじゃないかな。時間が経ったからといって、私はなんでも出来る万能人になんかなれっこない。落ち込んだり、見失ったり、何をしていいかわからなくなることはある。絶対、ある。これから先もなくならない。それが、あなたに言いたかったこと。

良く生きること。私はその言葉の意味を探しながら、ゆっくりあなたになる。会えたら、答え合わせしよう。どんな食い違いが生まれるんだろう。それが、ちょっと楽しみだな。

「見つかった？」

おれの言葉に、姉ちゃんは「うーん」ともったいぶるように間を置いてから「教えない」と言って意地悪く笑った。

「司が見つけなきゃ。それが一番の正解だよ」

電車を降りるとすぐに、姉ちゃんは駆け出した。おれと距離を離してから「家まで競争しよーっ。負けたらアイス奢りね！」と叫んだ。

おれはちよつとためらってから1歩踏み出し、走り始めた。遠ざかった姉ちゃんの背中に追いつくために。

教訓その八、わからないことは悪いことではない（後書き）

お疲れ様でした。ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5809y/>

ソクラテスの背中

2011年11月24日14時00分発行